

## 還 暦

吉尾令子

幸せとは何だろうか、よく考える。自分は生まれてこの方、あまり不幸であったとは思わない。むしろ、全てのことにおいて、恵まれており、幸せな人生だったと思っている。健康であり、良い家族に恵まれた。ただ、あまりにも幸せであったために、気付かず、見過ごしてきたことが多かったかもしれない。

私は、1961年うまれである。高度成長期に生まれ、バブルを経験し、日本が一番幸せだった時代に青春を過ごした。世界は常によくなくなっていく、成長していく、大人になれば、もっと素晴らしい世の中になっている、と思っていた。戦争という、悲惨な体験をした親たちが子どもを持って、最も人生で幸せである時期の喜びを、肌で感じて生きてきた。命の大切さを最もよく知っていた世代に私たちは育てられてきた。

ところが、私が中学生の頃だろうか、コインロッカーベイビーという言葉聞いた。親が、子どもをコインロッカーの中に捨てるのだ。昔、生活をしていけないために、口減らしとか、こけしとかがあったということは聞いていた。しかし、コインロッカーベイビーは、遊びで子どもができてしまつて、他に考えが至らなかつたために、捨てられた子供がほとんどだった。私は、幸せな家庭に育つたので、親が子供を捨てるなど、考えも及ばなかつたが、そう考えながら、生活している人も多くいたのだろうか。特に、最近、子どもが子どもを産んで、育児ができない状況が悲惨な状況を産んでしまうケースが多い。愛情がないのであれば、子どもを産んではならないと思う。単なる快楽は愛情ではない。

自分が大人になって、恋をして結婚し、子どもを育てることになって、生きていくのは大変なことなのだ、今さらながらに気が付いた。自分の血肉を分け与えながらも、働くことはできるが、出産のときはさすがに働けない。当然収入はなくなる。頼りは、旦那の収入だ。厳しい生活費の中で、子どもの笑顔だけが救いだった。

私は、早くに母を失くしている。母は、糖尿病という、今でこそ、ポピュラーだが、母の発症時である1970年代では、あまりまだ知られていなかった病気を持っていた。その病気に対し、病院は全く逆の処置を行い、母の症状は悪化した。糖尿病だとわかった時には、即刻入院という状態だった。私から見ると、病院に行くたびに、母は悪くなつていった気がする。リハビリのためと思つて入院させた病院では、何の薬を与えたのか、一気に悪くなつた。病院や薬に頼つていては、人間は助からないと思うようになった。病気にならないことが最も大切である。まずは、十分な睡眠とバランスの取れた食事、適度な運

動が重要と思われる。病院に行つて、医師の診断を仰ぐことは、臨床実験の結果を確認するためのものだ。後世の人の役には立つかもしれないが、本当に自分の命を守るためになるのかは、疑問だ。

コロナウイルスという病気が、毎日取りざたされている。今日はどこそこで何人発症したという報告が、ひっきりなしに入ってくる。一体これは何だろうか。どこにどう逃げようもない人たちに、こんなニュースばかり知らせてどうしようというのか。情報は必要だが、過剰な情報は、裏に隠れている何か他のことがあるのではないのかと勘繰りたくなってしまう。何人亡くなったというニュースは、本当にコロナウイルスが原因なのか、それとも他に要因があったのか定かではない。ともかく何が起ころうと、落ち着いて対処するしかないだろう。ワクチンが普及しないことには、私たちにできることはない。先ずは、予防として、マスク、手洗い、うがい、睡眠、食事、適度な運動、ソーシャルディスタンス。体調管理と健康維持に尽きる。できるだけのことをして、罹患したものなら運を天に任せるしかない。病院にも行くことになろう。

健康でたくましい命を、未来へつなぐことができれば幸せである。最近、少子化問題が取りざたされている。最近の女性はどうしたものだろうか。女性は子どもを産むための機械ではないが、子どもを産めるのは女性しかない。それなのに、恋もせず、職場と実家の往復しかせず、結婚をしない、子どもを産まない女性が増え続けたら、日本は滅ぶ。片や、外国からの移住者は多い。政府は、一時的なものにとらえているかもしれないが、そのまま帰化し、住み着いていくものも多い。日本の文化が壊れるとかは思わないが、摩擦が起きてほしくない。郷に入つては郷に従えということは理解してもらえらるだろうか。急激にはなく、ゆっくりと溶け合っていけばいいと思う。よき伝統は伝えていかればいい。ともに新しい日本の担い手となればいい。

私が二十歳代で母を介護していた時代、入院している患者には、夜は家族が付き添はなくてはならなかった。父も仕事をしていたので、私は、病院からボンボンベッドを借り、母の隣で付き添った。母に孫の顔を見せたいと思つて、縁があった男性と結婚をした。結婚式に出席することのできなかった母のために、母と主人と私の三人だけの結婚式を先にした。職場と家と病院を往復した。結局、母に孫の顔を見せてやることはできなかった。しかし、その後、男の子を二人授かることができた。私にとって、子育ては楽しいものだった。悪くなつていく一方の介護と違い、子どもは、できるようになつていくのだ。与えた笑顔の分、いやそれ以上の幸せをくれるのだ。女に生まれてよかったなどと思つたことはあまりなかったが、子どもを産んで、わが子との初めての対面のとほほど、女でよかったと思つたことはない。

還 曆

還曆を迎えて、赤いちゃんちゃんこを着せられ、孫に赤い帽子をかぶせられた。花束も頂いた。身に余る喜びである。棺桶に片足を突っ込みながらも、今は、世界一幸せな婆である。

